九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析的研究

徳永，幹雄
九州大学健康科学センター

橋本，公雄
福岡工業大学

https://doi.org/10.15017/351

出版情報：健康科学. 2, pp.75-90, 1980-03-30. 九州大学健康科学センター
バージョン：
権利関係：

体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析的研究

徳　永　幹　雄*
橋　本　公　雄**

A Factor Analytic Study on the Joy of Exercise in Physical Education

Mikio TOKUNAGA*
and Kimio HASHIMOTO**

The purpose of this paper is to extract the factors of the joy of exercise in physical education and to clarify the relationship between the factors of the joy and the individual traits. The questionnaire cosisted of 56 items concerning the joy factors was perfomed to 343 male and 97 female university students in 1977. Another questionnaire consisted of 47 items of the same topic was conducted to 108 boys and 93 girls of elementary school in 1979. For extracting the factors, the principle factor solution method with normal varimax rotation was applied to the 56×56 correlation matrix which was calculated from all students (or 47×47 correlation matrix from all school children).

Main results are summarized as follows;

1. 9 factors out of 13 factors extracted from university students were named as follows; satisfaction to the basic need for physical exercise, competition, challenge, human relationship, recreation, independent activity, thrill, watching and rooting, and improvement in physical fitness and sport skill.

2.10 factors out of 14 factors extracted from school children were named as follows; challenge, feeling of win, creative activity, admiration, health, competition, group activity, watching and rooting, thrill and self-actualization.

2. Male and female students had higher score in the factors of satisfaction to the basic need for physical exercise, and human relationship.

4. Boys had higher score in the factors of feeling of win, self-actualization and thrill. Girls had higher score in the factors of group activity, health and feeling of win.

5. It was shown that the scores of the joy were varied according to the individual traits such as sex, sport activity, clubs, physical fitness, likes or dislikes of sport, and course of physical education activity.

(Journal of Health Science, Kyusyu University, 2 : 75～90, 1980)

緒　言

人々の健康問題は重要な関心事となってきた。そして，健康は適度な身体活動によって維持・増進されることが実証されつつある。そのため，近年では生涯スポーツといった観点からスポーツへの社会化，すなわち，社会学的要因を中心としたスポーツ行動の要因分析[1-6) 12) 15) 18) 20) 39)]，や欲求，態度，信念などの心理学的要因を用いたスポーツ行動の分析や予測の研究が進められている[9) 25) 26) 35) 37)]。

* Institute of Health Science, Kyushu University, Ropponmatsu, Fukuoka, 810, Japan.
** Fukuoka Institute of Technology.

一方，学校体育における指導目標として，昭和52年に改訂された文部省の新指導要領は，昭和28年以来25年を経過して浮上したという「運動を楽しむ」，「運動に親しむ」といった心理的側面からの目標がクローズアップされている[22]。たとえば，小学校の教科目標として「……運動に親しみ……楽しく明るい生活を営む態度を育てる」，高学年の学科目標に「各種の運動の楽しさを体得するとともに……」，そして，中学校の学科目標に「……運動の楽しさを味わわせるとともに……」とあるように運動の喜びや楽しさといった感情面が強調されている。[40]

人の行動の動因の最も基礎的なものは「快苦の原理」[42]といわれるように，運動の楽しさを体得しておくことは，生涯スポーツに大きな役割を演じると考えるのは，むしろ，当然のことであろう。体力の低下，運動不足の現象にどれほど警鐘がなされても運動の楽しさを体験していない人にとって実践への道は遠い。運動の技術論，体力論，人間形成論などが運動を手段的意味として重視した以上に，運動すること自体の楽しさの感情を重視すべきであることを強調しているとうけとってよかろう。[33][34]　今後，国民の健康への関心がさらに高まるにしたがい，スポーツへの社会化に関する研究とともに，学校体育さらには社会体育で行われる体育・スポーツは「鍛練，根性」というイメージから「運動の楽しさや楽しみかた」などの感情の問題が追求される時代へと大きな転換が迫られているといわざるを得ない。

これまで，運動の楽しさの内容については実に多くの報告がなされた[8][10][11][13][14][21][24][32][36]。また，楽しさを体得させる工夫[8][11][19][21][24][28]，楽しさと体力・技術の関連[7][23][27][43]についても同様である。しかし，これらの多くは主観的見解にすぎず，評論的色彩が強い。

本稿では学生や児童が持っている体育授業における「運動の楽しさ」の因子を抽出し，それらの因子と個人的諸特性の関係を分析し，学習指導上の基礎的資料を得ることが目的である。

方　法

1．対象

大学生は九州大学1年生の中から男子343名（約20％），女子97名（約30％）の調査回答を得た。小学生は福岡市立田島小学校6年生全員から男子108名，女子93名の調査回答を得たので，これらを分析対象とした。

2．時期

大学生は昭和52年11月～12月，小学生は昭和54年7月に調査を実施した。

3．内容

(1)楽しさについて

運動の楽しさについての意見収集のため，大学生および小学生を対象にして「体育授業における楽しさ」について自由記述で予備調査を実施した。その中から，楽しさを表現していると思われる意見を抽出した。さらに，過去の文献から得られた意見を加えて，大学生は56個，小学生は47個の意見を選定した。なお，小学生にはこれらの意見のほかに5個の検証尺度を挿入した。

つぎに，これらの各意見に対して大学生用は5段階（強く楽しさを感じる，感じる，どちらもいえない，感じない，まったく楽しさは感じない），小学生用は3段階（楽しい，どちらもいえない，楽しくない）の回答肢を設けた。

(2)個人的特性について

運動の楽しさと諸特性の関係を分析するため性，週平均のスポーツ活動，体力診断テストの総合判定，中学・高校・大学でのサークル所属，運動の好き嫌い，体育実技の受講コースを調査した。

4．集計の手順

調査票の5段階の回答に対して「強く楽しさを感じる」に5点，「まったく楽しさを感じない」に1点を与え，その中間を4，3，2として，56個の意見相互についてピアソンの相関係数を求めた。3段階の回答は3点法を用い，同様に相関係数を求めた。求められた相関行列から主因子法による因る分析を行った。因子は大学生は56因子，小学生は47因子までの固有値及び累積寄与率を求めた時，固有値が1.000以上で，累積寄与率が約60％以上になった因子までを抽出することにした。それらの因子を直接バリマックス法により軸の直交回転を行った。抽出された因子の命名を行ない，それらの因子と諸特性の関係を分析した。

結果と考察

Ⅰ．楽しさの因子について

1．大学生について

回転後の因子行列を各因子ごとに負荷量の高い意見に配列すると表1のとおりである。累積寄与率は51.0％であった。各因子の解釈と命名を行うと，つぎのとおりである。

第1因子は「運動後気分がさっぱりする，なにもかも忘れて運動に夢中になる，思いっきりからだを動か

表1　大学生男女を対象とした回転後の因子行列（因子負荷量は小数点を省略）

Rotated Factor Matrix and Degree of Contribution on the Male and Female University Students.

因子	原番号	「楽しさ」について意見内容	F_1	F_2	F_3	F_4	F_5	F_6	F_7	F_8	F_9	F_{10}	F_{11}	F_{12}	F_{13}	h^2
第一因子	20	運動後気分がさっぱりすること	646	119	066	194	007	146	091	028	080	169	009	104	084	557
	86	なにもかも忘れて運動に夢中になること	641	175	124	225	024	138	099	005	008	049	069	072	−128	564
	25	思いっきりからだを動かすこと	614	070	102	164	131	116	186	045	161	−008	−005	−099	149	545
	49	運動後満足感が得られること	588	178	212	284	141	029	060	−001	178	218	−015	028	−016	603
	44	とにかく、心ゆくまで動きまわること	580	178	074	171	207	184	238	−016	089	084	008	−047	−141	544
	13	汗を流すこと	579	−040	248	112	−005	068	108	094	088	−081	018	021	197	490
	42	運動後の充実感があること	531	165	186	295	146	138	164	045	240	118	−159	022	−078	600
	45	運動によっていやなことを忘れること	473	132	158	289	168	−055	087	044	060	014	111	185	−202	482
	85	こころよい疲労が残ること	463	029	245	058	142	−062	166	024	128	374	−004	027	002	488
	15	自分のすきな運動をすること	339	305	−129	163	224	321	117	091	034	−080	098	092	171	480
第二因子	55	試合での勝利感を味わうこと	028	764	093	158	184	−069	129	052	047	−118	008	111	−055	707
	22	試合で勝つこと	104	734	−024	078	074	097	114	057	092	−071	044	040	068	609
	51	全力をつくして勝敗を競うこと	169	667	168	179	005	136	258	036	048	009	088	−167	−150	671
	24	運動場面ですばらしいプレーを発揮すること	217	575	057	178	017	188	287	070	152	040	−130	123	188	602
	50	記録が向上すること	092	561	176	187	197	089	009	184	372	128	−117	171	089	685
	19	自分の能力を十分に発揮すること	357	502	019	194	−035	358	230	−014	243	189	−090	069	168	782
	18	運動のなかで自分の存在が認められること	165	436	114	199	−001	226	251	−042	191	248	−012	198	223	572
	48	自分の実力をためすこと	192	415	200	243	122	090	216	−030	269	185	−125	048	−078	523
	10	練習の効果を試合でためすこと	160	375	087	115	−098	317	208	147	−007	096	−119	040	−167	412
第三因子	8	苦しいことつらいことを最後までやりぬくこと	205	051	612	165	−001	284	127	090	011	−000	−111	046	094	549
	88	苦しい練習に耐えること	265	129	592	141	042	140	077	030	217	−021	004	066	−110	550
	14	自分の限界に挑戦すること	324	146	522	107	−014	109	199	038	128	−050	−058	−003	283	566
	81	苦しかったことを思いかえすこと	119	155	426	162	−075	055	116	134	249	042	099	211	−058	408
	27	目標とすることを征服すること	187	252	363	215	224	336	080	−091	210	188	−029	137	080	554
	6	基礎技術をじっくり練習すること	078	−128	363	040	085	161	−062	115	128	190	223	−112	−127	335
第四因子	56	運動によって連帯感が深められること	203	287	134	762	035	062	090	001	140	124	049	−001	022	773
	47	運動の中でお互の協調性が得られること	259	180	157	684	152	087	148	−011	136	098	039	−012	−007	673
	52	チームやグループが協力しあって運動すること	247	292	262	577	069	162	120	013	088	105	035	−081	−014	621
	1	運動を通じてお互の信頼が深められること	172	046	138	521	−067	381	017	054	064	008	075	057	−030	453
	16	運動によって新しい友達ができること	275	138	124	520	054	231	050	169	139	−029	−068	090	152	525
	40	運動の間に仲間といろいろな話しをすること	162	−042	041	494	192	104	090	234	006	033	−085	208	032	485
	46	好きな仲間でグループをつくり運動すること	200	139	−031	463	256	089	125	081	064	−003	043	159	−042	404
第五因子	54	自由にできること	138	092	043	157	551	006	079	−048	083	005	100	037	−016	384
	37	軽度の運動であること	−052	−051	−022	035	492	−022	−084	270	−104	265	228	040	−082	463
	28	自分のできる運動をすること	207	212	033	070	433	156	006	151	083	052	060	−007	038	343
第六因子	3	目標をたて、それに向って努力すること	107	091	323	228	078	582	061	−018	145	036	−031	029	−023	549
	2	自分達の計画のもとで運動すること	095	105	157	257	071	508	181	−029	204	−125	090	048	043	477
	9	できなかったことが少しづつできるようになること	223	182	277	198	092	443	−011	139	112	111	−043	097	008	458
第七因子	30	スリル感を味わうこと	159	206	015	122	010	−004	616	−034	122	016	035	186	078	521
	17	緊迫した場面に直面すること	303	205	216	081	−075	162	513	013	031	061	−075	−078	077	504
	41	スピード感にひたること	214	228	−014	080	199	009	489	086	242	−005	−161	136	−169	523
	7	策戦をねるような場面があること	127	211	163	128	−014	325	411	029	−013	073	−152	012	007	407
	5	運動の中で緊張感があること	358	155	139	008	−064	249	355	−008	065	112	−098	026	−045	389
	12	運動によって華麗さ、美しさを表現すること	107	175	210	069	072	−033	342	216	018	128	081	072	256	355
	39	未経験の新しい運動をすること	195	102	113	159	096	124	272	−004	215	−043	−017	056	−123	253
第八	11	人のするのを見る	012	068	059	013	072	008	056	726	055	−006	110	−065	−023	564
	23	人の運動を応援すること	079	141	163	298	075	047	−015	518	069	132	022	026	062	442
第九因子	32	持久力が向上すること	152	085	400	206	064	108	113	142	578	028	044	−025	048	621
	21	筋力が向上すること	156	207	170	080	−022	181	125	016	573	051	114	080	023	508
	48	敏しょうな動きができるようになること	224	314	064	164	215	195	277	127	430	078	−182	−032	−141	601
	53	体調がよくなること	274	209	161	235	345	080	018	025	368	162	−098	−054	117	509
	26	妙な支配関係がない中ですること	233	157	102	180	200	155	150	−008	251	114	216	038	107	344
第十	34	運動のリズム感を味わうこと	263	105	−015	222	158	038	301	084	107	449	075	−013	026	473
	33	勝敗にこだわらずゲームをすること	240	−275	013	109	226	062	−015	190	082	419	202	114	−004	473
十一	4	技術的にやさしい運動をする	015	−061	−008	041	212	−032	−096	134	022	068	554	035	006	391
十二	29	異性といっしょに運動すること	054	162	114	165	068	126	197	−065	055	041	041	497	013	336
		ΣF^2	4.833	4.315	2.633	3.815	1.671	2.173	2.398	1.295	2.053	1.124	0.842	0.737	0.686	28.575
		分散寄与率（$F^2/n \times 100$）	8.6	7.7	4.7	6.8	3.0	3.9	4.3	2.3	3.7	2.0	1.5	1.3	1.2	
		累積分散寄与率	8.6	16.3	21.0	27.8	30.8	34.7	39.0	41.3	45.0	47.0	48.5	49.8	51.0	

す，運動後満足感が得られる，とにかく心ゆくまで動きまわる」などに高い因子負荷量が認められた。この因子は運動に夢中になり，思う存分からだを動かし，運動後に満足感や充実感などの快的感情を味わうことである。これは運動の最も基本的な欲求を満足させることであると解釈されるので「運動の基本的欲求充足の因子」と命名した。分散寄与率は8.6％を示し，13因子のなかで最も高かった。

第2因子は「試合で勝利感を味わう，試合で勝つ，全力をつくして勝敗を競う」などに高い負荷量がみられた。競争的内容と解釈されるので「競争の因子」と命名した。分散寄与率は7.7％で第2番目に高かった。

第3因子は「苦しいことやつらいことを最後までやりぬく，苦しい練習に耐える，自分の限界に挑戦する」などに高い負荷量がみられた。挑戦的内容と解釈されるので「挑戦の因子」と命名した。

第4因子は「運動によって連帯感を味わう，運動の中でお互の協調性が得られる，チームやグループが協力しあって運動する」などに高い負荷量がみられた。人間関係が向上する内容と解釈されるので「人間関係の因子」とした。分散寄与率は6.8％で第3番目に高かった。

第5因子は「自由にできる，軽度の運動である，自分のできる運動をする」に高い負荷量がみられた。遊び的要素が内容と解釈されるので「レクリエーションの因子」とした。

第6因子は「目標をたてそれに向って努力する，自分達の計画のもとで運動する」に高い負荷量がみられた。自主的活動の内容と解釈されるので「自主的活動の因子」とした。

第7因子は「スリル感を味わう，緊迫した場面に直面する，スピード感にひたる」などに高い負荷量がみられた。スリル感を味わう内容と解釈されるので「スリル感の因子」とした。

第8因子は「人のするのを見る，人の運動を応援する」に高い負荷量がみられたので，「観戦・応援の因子」とした。

第9因子は「持久力が向上する，筋力が向上する，敏しょうな動きができるようになる，記録が向上する」などに高い負荷量がみられた。体力が向上したり，技術が進歩したりする内容と解釈されるので「進歩・向上」の因子とした。

そのほか，第10〜13因子は共通する内容がみられず解釈不能の因子とした。解釈が可能であった9因子の累積寄与率は45.0％で，その内容を要約すると表2のとおりである。

表2　大学生の「楽しさ」の因子とその内容
Names and Contents Concerning the Joy Factors on the University Students.

「楽しさ」の因子名 Names concerning the joy factors	活動内容 Contents
1. 運動の基本的欲求充足(Satisfaction to the basic need for physical exercise)	運動に夢中になり，思う存分動きまわり，満足感・充実感が残るなどの運動の基本的欲求を充足すること。
2. 競　争 (Competition)	勝敗を競い，勝利感を味わう。また，全力をつくして，実力をためす，などの競争をすること。
3. 挑　戦 (Challeng)	苦しいことやつらいことを最後までやりぬき，苦しい練習に耐える。また，自分の目標を征服したり，限界に挑戦すること。
4. 人間関係 (Human relationship)	協調性や連帯感を味わい，お互の信頼感がわいたり，友達ができたりするなどの人間関係がよくなること。
5. レクリエーション (Recreation)	軽度の運動であったり，自分のできる運動であり，しかも自由にできる，などのレクリエーション的要素があること。
6. 自主的活動 (Independent activity)	自分達の計画で運動したり，目標をたてそれに向って努力するなどの自主的活動をすること。
7. スリル感 (Thrill)	緊迫場面があり，スリルやスピード感があったり，策戦をねったりするなどのスリル感を味わうこと。
8. 観戦・応援 (Watching and rooting)	人の運動を見たり，応援をしたりすること。
9. 進歩・向上 (Improvement in physical fitsess and sport skill)	持久力・筋力などの体力や技術についての進歩や向上を図ること。

表3　小学生男女を対象とした回転後の因子行列（因子負荷量は小数点を省略）
Rotated Factor Matrix and Degree of Contribution on the School Children.

因子	原番号	「楽しさ」について意見内容	F_1	F_2	F_3	F_4	F_5	F_6	F_7	F_8	F_9	F_{10}	F_{11}	F_{12}	F_{13}	F_{14}	h^2
第一因子	21	苦しいことやつらいことを最後までやりぬくこと	711	145	014	048	179	011	194	−044	−012	098	013	183	045	−070	653
	3	苦しい練習に耐えること	682	137	129	−006	−107	−075	117	005	−099	−060	102	124	−104	−293	668
	13	なんどもなんどもできるまで練習すること	603	−039	261	−014	110	131	020	−009	089	149	218	−024	018	041	544
	1	汗をかくほど運動すること	550	006	−194	105	084	−395	−110	008	104	−109	158	284	025	−190	690
	30	できないことに挑戦すること	506	−109	−048	−014	008	−137	198	073	220	356	−011	221	173	018	587
	37	運動後、満足感があること	408	−102	171	091	318	−213	−285	0	085	067	256	−248	185	133	633
第二	29	試合で勝つこと	014	835	071	076	031	−028	−042	058	030	107	040	−039	152	−065	759
	20	試合で勝利感を味わうこと	076	785	010	152	−049	−145	−172	074	−021	−044	−032	113	044	074	727
第三因子	25	運動によってなにかを新しく発見すること	112	−025	693	081	042	042	016	101	079	094	088	030	039	−144	559
	6	自分達で計画して運動すること	084	165	690	−204	070	−159	−136	−020	154	017	−031	155	027	075	656
	24	目標をつくってそれに向って練習すること	364	−017	377	047	132	024	−122	371	223	294	261	097	091	001	670
第四因子	17	みんなから拍手されること	−027	194	041	753	043	−003	−048	094	206	180	−099	−065	107	−017	722
	8	人から応援してもらうこと	071	−007	−107	753	−019	−141	−017	035	173	−017	111	049	−056	−086	661
	26	先生やほかの人にほめられること	031	257	069	573	032	100	−057	−068	016	134	261	113	278	−016	596
第五因子	44	健康なからだになること	076	−063	058	143	750	031	080	075	−092	−144	078	232	174	−054	732
	36	からだの調子がよくなること	064	113	−035	−192	735	−110	−100	050	200	197	008	−103	040	−134	729
	19	運動後、気分がさっぱりすること	282	−097	070	393	495	−161	−110	039	053	181	194	156	−179	196	701
第六因子	2	記録や順位を競い合うこと	043	282	081	−021	016	−581	069	222	−134	136	−022	095	200	−136	585
	10	記録や順位が向上すること	−076	216	−031	−051	182	−547	−017	−202	123	478	146	031	022	−174	725
	7	スピード感を味わうこと	367	−152	307	159	−062	−515	029	−012	−028	220	−050	−045	190	−147	659
	45	運動によっていやなことを忘れること	103	055	−001	159	252	−489	037	108	160	012	435	181	−129	131	636
第七因子	22	運動の中でみんなと「はしゃぐ」こと	−124	248	105	049	009	012	−667	071	120	−020	069	139	020	−035	582
	4	運動の中でみんなと笑いあえること	−113	−156	249	254	067	028	−510	−390	−107	079	088	213	−084	−074	665
	5	ときどき遊べること	−112	169	−136	−028	243	050	−473	230	009	−024	136	−067	215	−349	590
	18	苦手なものができるようになること	007	−015	333	083	162	−099	424	015	076	−182	305	−046	160	−129	510
	41	自分の得意な運動をすること	−103	122	047	083	030	−325	−405	244	002	250	265	−049	295	075	593
第八	15	好きな運動をすること	−089	166	083	120	130	−057	−091	768	−028	092	031	112	005	−239	755
第九	34	人の運動を応援すること	−009	−070	096	195	038	036	053	000	762	098	145	098	073	−016	684
	46	人の運動をみること	092	075	120	125	049	−030	−097	008	728	−085	137	076	−024	−077	609
第十	33	すばらしいプレーができるようになること	090	−002	146	232	076	−070	−027	126	−069	659	201	143	128	−048	629
	16	スリル感を味わうこと	239	203	081	234	−168	−199	−148	119	−073	463	032	036	089	−228	546
第十一因子	11	なにもかも忘れて運動に夢中になること	029	029	041	000	024	−101	012	−011	014	436	658	012	−027	−238	695
	23	勝敗にこだわらずに運動をすること	265	−050	−034	101	035	−009	−162	040	163	040	641	102	−009	−007	563
	31	みんなと協力しあって運動すること	090	032	252	052	076	034	−028	038	369	−025	590	225	146	−095	650
第十二因子	39	みんなといろいろな運動をすること	163	051	127	−009	034	006	−165	105	090	102	192	717	126	−062	673
	28	思いっきりからだを動かすこと	334	067	023	−003	155	−182	−065	−043	201	441	−056	473	−040	−037	644
	43	しんけんに運動をすること	217	064	−021	194	298	−114	−019	−025	288	195	070	436	080	−101	524
	14	チームプレーがうまくできるようになること	088	132	295	245	171	−103	155	−016	−024	017	334	415	346	−204	683
	42	人の運動からいろいろなことを学ぶこと	345	−079	203	031	−070	−092	−255	269	268	−045	007	366	051	−023	529
	38	自分の実力を試合でためすこと	212	129	127	−020	−029	−157	−015	320	039	286	208	337	159	−051	475
第十三因子	27	今までできなかったことができるようになること	143	108	188	−108	060	021	021	097	090	026	204	174	679	−217	682
	9	人ができないことが自分にできること	−101	078	−078	238	056	−370	−063	−173	004	018	−167	014	611	105	666
	47	いろんな運動がみんなよりはやくできるようになること	090	341	037	262	080	008	−019	186	130	322	−111	036	464	037	587
	35	人より良い記録をつくること	067	427	−047	077	126	−143	−096	137	−059	347	031	127	472	158	648
第十四因子	12	全力をつくして試合をすること	134	−114	084	031	003	−158	028	256	−002	133	062	124	−045	−691	647
	40	練習を一生懸命すること	360	014	069	111	131	003	−109	906	288	021	121	010	205	−550	619
	32	のびのびと運動ができること	081	200	318	100	226	−034	−229	−158	151	256	186	229	−110	−404	638
	Σ		3233	2322	2036	2365	2042	1957	1834	1555	2043	2331	2380	2090	2081	1759	
	分散寄与率（$F^2/n \times 100$）		6.9	4.9	4.3	5.0	4.3	4.2	3.9	3.3	4.3	5.0	5.1	4.4	4.4	3.7	
	累積分散寄与率		6.9	11.8	16.1	21.1	25.4	29.6	33.5	36.8	41.1	46.1	51.2	55.6	60.0	63.7	

2．小学生について

回転後の因子行列から，各因子ごとに負荷量の高い意見を配列すると表3のとおりである。累積分散寄与率は63.7%であった。各因子の命名を行うと，つぎのとおりである。

第1因子は「苦しいことやつらいことを最後までやりぬく，苦しい練習に耐える，なんどもなんどもできるまで練習する，できないことに挑戦する」などに高い負荷量がみられ，「挑戦の因子」と命名した。分散寄与率は6.9%で14因子のなかで最も高かった。

第2因子は「試合に勝つ，試合で勝利感を味わう」に高い負荷量がみられ，「勝利感の因子」と命名した。

第3因子は「運動によってなにか新しく発見する，自分達で計画して運動する，目標をつくってそれに向って練習する」に高い負荷量がみられ，「創造的活動の因子」と命名した。

第4因子は「みんなから拍手される，人から応援してもらう，先生やほかの人にほめられる」に高い負荷量がみられ，「賞賛の因子」とした。分散寄与率は5.0%で第3番目に高かった。

第5因子は「健康なからだになる，からだの調子がよくなる，運動後気分がさっぱりする」に高い負荷量がみられた。心身の健康が増進する内容と解釈されるので「健康の因子」とした。

第6因子は「記録や順位を競い合う，記録や順位が向上する，スピード感を味わう」に高い負荷量がみられ，「競争の因子」とした。

第7因子は「運動の中でみんなとはしゃぐ，運動の中でみんなと笑いあえる，ときどき遊べる」などに高い負荷量がみられた。みんなと一緒に愉快に運動ができることの内容と解釈されるので「集団活動の因子」とした。

第9因子は「人の応援をする，人の運動をみる」に高い負荷量がみられ，「観戦・応援の因子」とした。

第13因子は「今までできなかったことができるようになる，人ができないことが自分にできる，いろんな運動がみんなよりはやくできるようになる，人より良い記録をつくる」に高い負荷量がみられた。自己の目標を実現する内容と解釈されるので「自己実現の因子」とした。

このほか，第8，第10，第11，第12，第14因子は分散寄与率の高い因子もみられたが，共通な内容を解釈することができなかった。解釈可能な因子の累積分散寄与率は47.2%で，その内容を要約すると表4のとお

表4　小学生の「楽しさ」の因子とその内容
Names and Contents Concerning the Joy Factors on the School Children.

「楽しさ」の因子名 Names Concerning the Joy Factors	活動内容 Contents
1．挑戦（Challenge）	苦しいことやつらいことを最後までやりぬいたり，苦しい練習に耐え，できないことをなんどもできるまで練習するなどの挑戦をすること。
2．勝利感（Feeling of win）	試合で勝つことにより，勝利感を味わうこと。
3．創造的活動（Creative activity）	運動によってなにかを発見したり，自分達で目標をたてたり，計画をたてたりして練習するなどの創造的活動をすること。
4．賞賛（Admiration）	みんなから拍手されたり，応援してもらったり，先生やほかの人にほめられるなど賞賛されること。
5．健康（Health）	健康なからだになったり，体調がよくなったり，運動後気分がさっぱりするなど心身が健康になること。
6．競争（Competition）	記録や順位を競ったり，向上させたりして競争をすること。
7．集団活動（Group activity）	みんなとはしやいだり，笑いあったり，時には遊んだりして，みんなと一緒に運動ができること。
8．観戦・応援（Watching and rooting）	人の運動を見たり，応援したりすること。
9．スリル感（Thrill）	すばらしいプレイができるようになったり，スリル感を味わうこと。
10．自己実現（self-actualization）	できなかったことができるようになったり，人ができないことが自分にできること，また，人よりはやくできたり，よい記録をつくるなど自己実現の欲求を充たすこと。

りである。

以上のように，楽しさを感じる活動内容として大学生は9因子，小学生は10因子を解釈することができた。これらの因子は従来多くの授業研究の中で指摘されたすぐれた授業の条件と類似するものが多い。たとえば，高田[31]が良い授業の条件とした「快的な運動，技能の伸長，明るい交友，新しい発見」や小林[16]のよい授業の姿である「自主的・創造的な集団活動をベースにして，積極的な学習意欲が育ち，それがひたむきな活動を生み，その活動がワザや力の伸びに結びつくとき，本当のよろこびが生まれる」といった内容と類似点が多い。また，欲求論から楽しさの内容を示した加賀[13][14]は「活動，解放，集団所属と協力，承認，自己実現・自己表現，達成」の6つの欲求をあげ，高田[31]，加賀[13][14]の条件を加味して西[24]は子どもが求める授業で運動に関る欲求として「健康・安全，活動，所属・協同，承認，遊戯，達成，探究，表現・創造」の8つの欲求を示している。さらに，実践を通して提示された多くの報告[8][10][11][13][14][21][24][32]でも重複する内容が多い。人の感情を快一不快論で説明するとき，「ある欲求が満たされたときに起る快感情が満足の感情であり」[29]，欲求論からの「楽しさ」はこの種の感情を意味するものであろう。「たのしい」とは「満足で愉快な気分である」[30]と解釈されたり，油谷[44]は「喜悦，愉快などと表現される楽しさ感情は，欣喜，満足，幸福などとともにK．シュナイダーによって，快としての状態感情として分類されたものに属している」と述べているが，心理学的用語としての解釈は不明瞭である。

運動の楽しさが単なる遊び的要素のものだけでないことや発達段階によって異なることは当然であろう。大学生の第1因子に示された「運動の基本的欲求充足」はこの因子が満たされることによって，日常生活の不安や緊張が減少し，怒りや憎しみなどが柔らげられ，緊張によって生じていた生体の変化が解消され，体調（睡眠，食欲，排便など）が正常にもどるということが学生の持つ運動の楽しさの根底にあることを示唆しているものと思われる。また，小学生の第1因子であった「挑戦」もまた，この年齢の子どもの持つ好奇心，冒険心などが運動の楽しさの根底にあることを示していよう。加賀[13]が指摘するように各年令の発達課題に応じた楽しさの学習課題を発見してゆくことが今後の重要な課題となろう。

Ⅱ．楽しさと諸特性の関係

1．大学生について．

(1) 性差

男女別に各因子の平均値と標準偏差を算出すると表5のとおりである。相対的に楽しさに高得点がみられる因子は男子では「運動の基本的欲求充足，競争，人間関係」であり，女子では「運動の基本的欲求充足，人間関係，レクリエーション」であった。低得点の因子は男子は「観戦・応援，自主的活動」で，女子は「スリル感，進歩・向上」であった。

平均値に1～5％水準で有意な性差が認められる因子は「人間関係，レクリエーション，観戦・応援」であり，いずれも女子に高得点がみられた。男子が高得点を示す因子は「スリル感，進歩・向上，競争」であったが，いずれも顕著な差ではなかった。

表5　大学生の「楽しさ」の平均値及び標準偏差
Means and S.D. of the Joy Score on the University Students.

Factors	Male N=343 M.	Male N=343 S.D.	Female N=97 M.	Female N=97 S.D.	t
1.運動の基本的欲求充足（Satis.）	35.2	4.76	36.3	5.63	-0.924
2.競争（Compe.）	34.2	5.30	33.9	5.34	0.491
3.挑戦（chal.）	13.9	2.58	14.3	2.87	-1.509
4.人間関係（Hu.rela.）	26.4	3.69	27.6	4.56	-2.674**
5.レクリエーション（Rec.）	10.8	1.52	11.7	1.28	-5.322**
6.自主的活動（Inde.）	6.9	1.42	7.2	1.62	-1.777
7.スリル感（Thrill）	18.0	2.86	17.4	3.38	1.748
8.観戦・応援（W.&R.）	6.4	1.52	7.6	1.29	-7.084*
9.進歩・向上（Improve.）	10.7	1.99	10.5	1.99	0.873

注）各因子の得点は表1の□内の意見の合計である。**P＜.01

(2) 楽しさとスポーツの実施程度

週平均のスポーツの実施程度別に各因子の平均値を表6に示した。実施程度の多い群（週5～6日），中間群（週1～2），少ない群（全然しない）の平均値を表5で求められた男女別の平均値と標準偏差を基準にしてT得点に変換して各群のプロフィールを示すと図1のとおりである。男女ともスポーツの実施程度が減少するほど，「レクリエーション，観戦・応援」の因子を除けば，楽しさの得点は低下した。実施程度の

表6　週平均のスポーツ活動と「楽しさ」の平均得点（大学生）
Relationship between Sport Activity and Mean of the Joy Score on the University Students.

	Sport activity for a week	N	1 運動の基本的欲求充足 (Satis.)	2 競争 (Compe.)	3 挑戦 (Chal.)	4 人間関係 (Hu.rela.)	5 レクリエーション (Rec.)	6 自主的活動 (Independ.)	7 スリル感 (Thrill)	8 観戦・応援 (W.& R.)	6 進歩・向上 (Improve.)
Male	1.週5～6日	47	36.3	36.0	15.4	28.2	10.5	7.4	18.3	6.7	11.6
	2.週3～4日	43	34.9	32.9	13.4	25.8	10.5	7.0	17.3	6.5	10.4
	3.週1～2日	171	35.5	34.9	13.9	26.7	10.9	7.0	18.4	6.6	10.7
	4.月1～2日	44	35.1	33.4	14.1	26.4	11.1	6.8	17.9	5.5	10.5
	5.全然しない	35	33.0	31.0	12.3	23.9	10.6	6.1	16.3	6.3	9.9
	t（1－5）		2.625**	3.614**	4.954**	4.982**	－0.306	4.481**	2.694*	1.172	3.650**
Female	1.週5～6日	5	40.4	36.4	16.0	30.4	11.3	8.8	18.2	8.2	12.0
	2.週3～4日	10	35.3	33.3	13.6	28.8	11.0	7.3	16.8	7.9	10.3
	3.週1～2日	68	36.6	34.4	14.6	28.0	11.8	7.2	17.8	7.6	10.7
	4.月1～2日	4	33.0	32.0	14.5	23.5	12.3	7.5	14.8	6.8	9.8
	5.全然しない	9	34.9	30.1	12.8	23.0	11.3	6.1	16.1	7.6	9.0
	t（1－5）		1.407	1.302	1.720	3.006**	0	2.036	0.739	0.701	2.090

note；1. 5－6 days/w.　2. 3～4 days/w.　3. 1～2 days/w.　4. 1～2 days/month　5. none
**p<.01　*p<.05

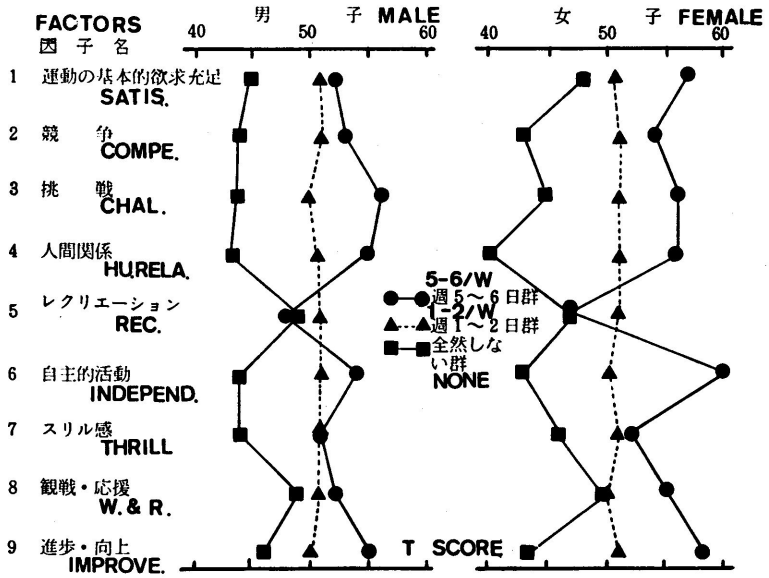

図1　週平均のスポーツの実施程度と「楽しさ」の関係（大学生）
Relationship between Course of Physical Education in the Second Semester and the Joy Score on the University Students.

多少により有意差が認められる因子は，男女とも「人間関係」であった。そのほか男子では「挑戦，自主的活動，進歩・向上，競争，スリル感，運動の基本的欲求充足」の因子に有意差が認められた。

(3) 楽しさとサークル所属

中学時代，高校時代のいずれも体育部に所属した群，文化部群，無所属群の3群の平均値と標準偏差を求めた。高得点を示す体育部群と低得点を示す無所属群の平均値をT検定した。1～5％水準で有意差が認められる因子は，男子は「挑戦，自主的活動，スリル感，競争」であり体育部群が高得点を示し，「レクリエーション」では低得点を示した。女子では「運動の基本的欲求充足，人間関係，スリル感，競争」であり体育部学生が高得点を示した。

大学でのサークル所属別からみると図2のようなプロフィールがみられた。男子では体育部群は無所属群に比較して，「挑戦，人間関係，自主的活動」で1～5％水準で有意な高得点を示し，「レクリエーション」で低得点を示した。女子では，体育部群が「自主的活動，観戦・応援，人間関係」で有意な高得点を示した。

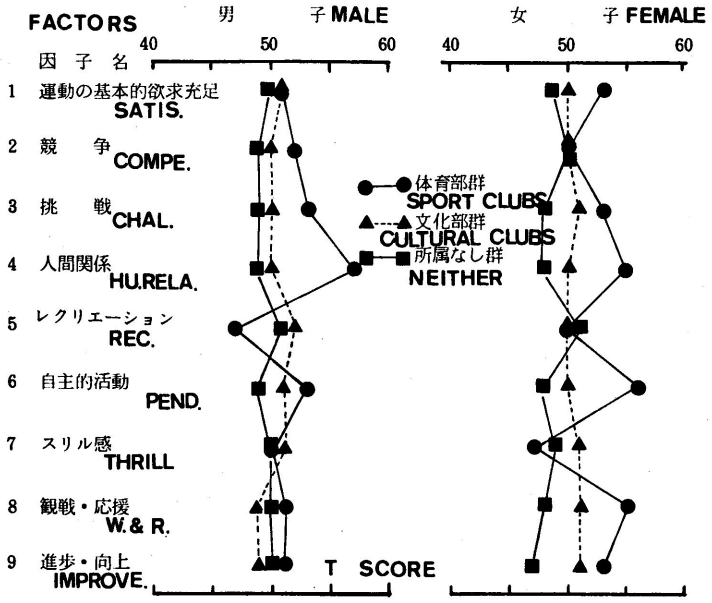

図2　大学でのサークル所属と「楽しさ」の関係
Relationship between Circle Activity and the Joy Score on the University Students.

(4) 楽しさと体力

文部省の体力診断テストの中から背筋力，立位体前屈，踏み台昇降，垂直とび，反復横とびの5種目を測定し，種目別得点の合計得点と九州大学の学生用に5段階の総合判定をした。体力の5段階ごとに平均値と標準偏差を求め，高位群（A），中位群（C），低位群（E）のプロフィールを示すと図3のとおりである。高低群の平均値に1～5％水準で有意差が認められる因子は，男子は「進歩・向上」，女子は「スリル感，観戦・応援」であった。男女とも体力の高い学生ほど高得点がみられた。

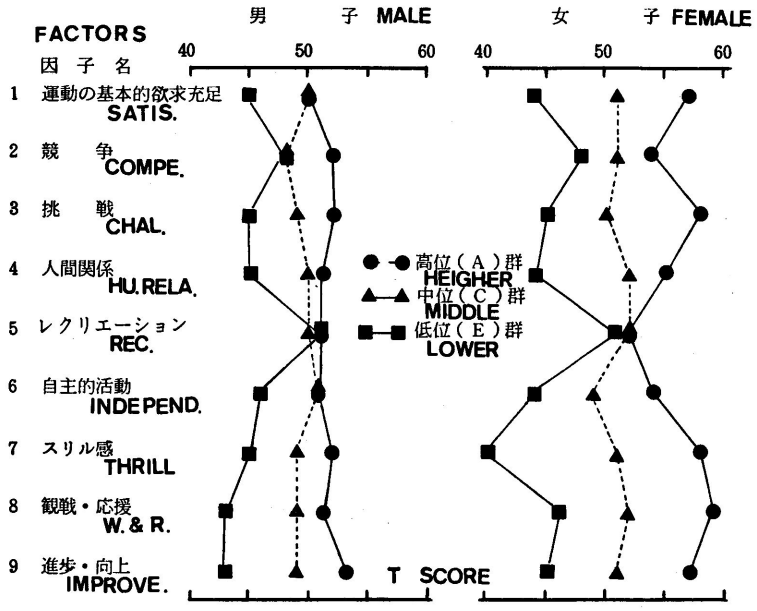

図3　体力と「楽しさ」の関係（大学生）
Relationship between Physical Fitness and the Joy Score on the University Students.

(5)　楽しさと運動の好き嫌い

運動の好き嫌いによって楽しさの平均値と標準偏差を求め，表7に示した。「非常に好き」，「どちらともいえない」，「嫌い」の3群のプロフィールを示す

表7　運動の好き嫌いと「楽しさ」の平均得点
Relationship between Likes or Dislikes of Sport and Mean of the Joy Score on the University Students.

	Likes or disikes of sport	N	1 運動の基本的欲求充足 (Satis.)	2 競争 (Compe.)	3 挑戦 (Chal.)	4 人間関係 (Hu.rela.)	5 レクリエーション (Rec.)	6 自主的活動 (Independ.)	7 スリル感 (Thrill)	8 観戦・応援 (W.& R.)	9 進歩・向上 (Improve.)
Male	1. 非常に好き	127	37.3	35.7	14.6	27.2	10.6	7.2	18.9	6.4	10.9
	2. 好き	169	34.8	34.0	13.8	26.5	10.9	6.9	17.8	6.4	10.8
	3. どちらともいえない	40	31.5	31.6	12.8	24.2	11.0	6.4	16.3	6.2	10.0
	4. 嫌い	6	30.7	29.2	12.3	22.0	11.2	6.0	14.2	6.7	10.0
	t (1−4)		3.660**	3.143**	1.993*	3.706**	−0.948	1.939	3.905**	−0.448	0.991
Female	1. 非常に好き	20	41.2	36.0	16.1	29.8	11.7	8.4	19.2	7.2	11.2
	2. 好き	49	36.2	33.8	14.2	27.8	11.7	7.0	17.6	7.8	10.5
	3. どちらともいえない	16	33.8	33.7	14.1	26.3	11.7	7.1	16.0	7.6	10.1
	4. 嫌い	10	34.0	31.3	13.4	25.5	11.9	6.7	15.6	7.6	9.9
	t (1−4)		4.100**	2.610*	2.397*	2.629*	−0.344	2.817**	2.959**	−0.680	1.752

note ; 1. Strongly likes　2. Likes　3. Neither　4. Dislikes
**p<.01　*p<.05

と図4のとおりである。「非常に好き」と「嫌い」群の平均値をT検定し，1～5％水準で有意差が認められる因子は，男子では「スリル感，人間関係，運動の基本的欲求充足，競争，挑戦」であった。女子では「運動の基本的欲求充足，スリル感，自主的活動，人間関係，競争，挑戦」であった。「レクリエーション，観戦・応援」の因子は顕著ではないが「嫌い」群が男女とも高得点を示した。

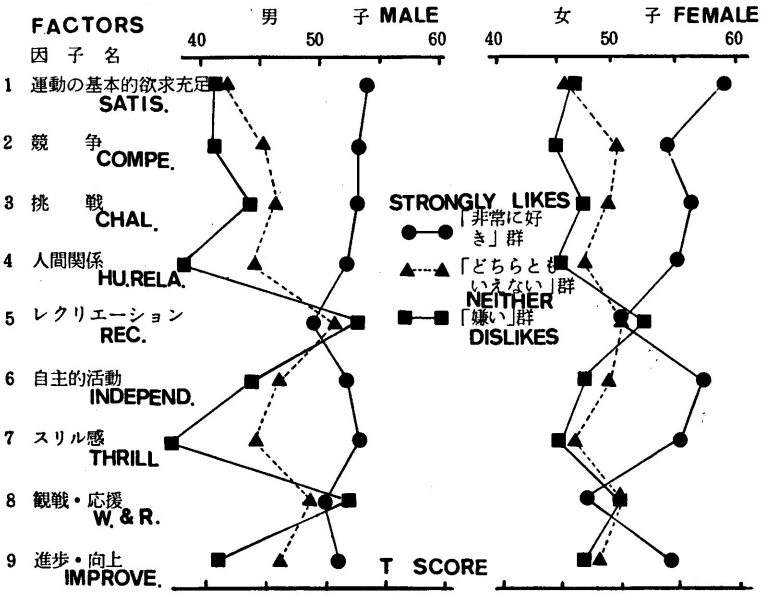

図4　運動の好き嫌いと「楽しさ」の関係（大学生）
Relationship between Likes or Dislikes of Sport and the Joy Score on the University Students.

(6)　楽しさと受講コース

体育実技の受講コースによって比較した。本学では前期の総合Ⅰコース（体力低位学生を中心としたコース）を除いて，学生の選択によって決定される。前期，後期の受講コースごとに楽しさの得点を比較すると図5，6のとおりである。前期では男女とも総合Ⅰコースの得点が低く，テニスコースが高得点を示した。後期では卓球コースが低得点で，総合Ⅱコース（1学期に数種目を複合して行うコース）が「挑戦」の因子を除いて高得点を示した。

2．小学生について

(1)　性差について

解釈が可能であった10因子の平均値と標準偏差を示すと表8のとおりである。男子で高得点がみられるのは「勝利感，自己実現，スリル感」の因子であり，女子では「集団活動，健康，勝利感」であった。低得点は男女とも「観戦・応援，挑戦」であった。

性差に1～5％水準で有意差が認められる因子は「勝利感，競争」であり男子が高得点を示し，「集団活動，観戦・応援」では女子が高得点を示した。

(2)　楽しさと正課のクラブ所属

正課のクラブ所属別に平均値の合計得点を示すと表9のとおりである。男子では陸上クラブの得点が高く，卓球クラブの得点が低かった。両群の各因子の平均値をT検定で比較すると，「挑戦，賞賛」の因子で5％水準の有意差が認められた。女子ではバスケットボールクラブが最も高く，文化系クラブ所属者が最も低かった。両群には「挑戦，競争，自己実現」の因子に1～5％水準の有意差が認められた。

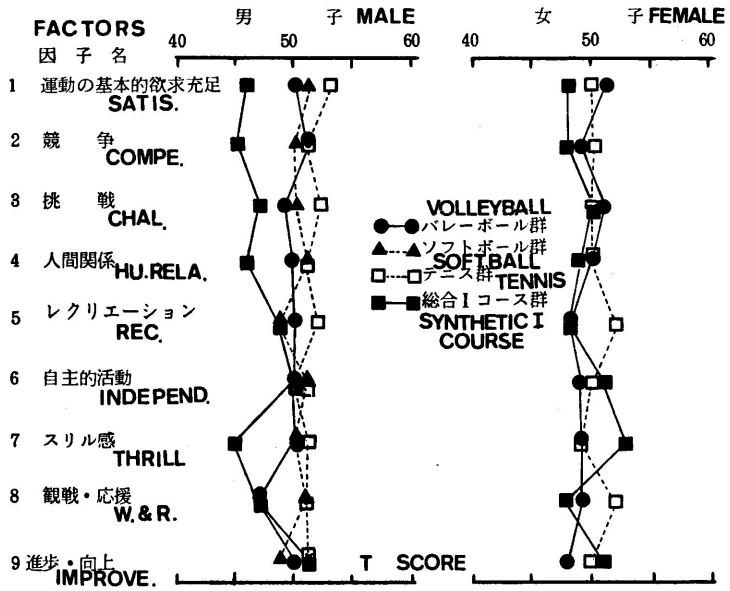

図5 前期の受講コースと「楽しさ」の関係（大学生）
Relationship between Course of Physical Education in the First Semester and the Joy Score on the University Students.

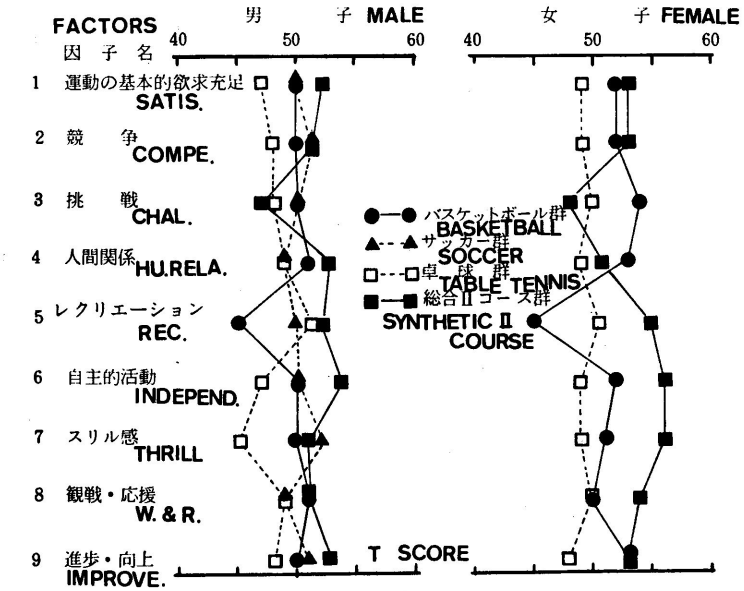

図6 後期の受講コースと「楽しさ」の関係（大学生）
Relationship between Course of Physical Education in the Second Semester and the Joy Score on the University Students.

表8　小学生の「楽しさ」の平均値，標準偏差
Means and S.D.of the Joy Score on the School Children.

Factors	1. Boys N=108 M.	1. Boys N=108 S.D.	2. Girls N=93 M.	2. Girls N=93 S.D.	t (1－2)
1 挑　戦 (Chal.)	2.47	0.56	2.40	0.61	0.850
2 勝利感 (F. of win)	2.86	0.36	2.73	0.47	2.230*
3 創造的活動 (Creat.)	2.50	0.59	2.53	0.57	－0.367
4 賞　賛 (Admirat.)	2.52	0.57	2.63	0.54	－1.398
5 健　康 (Health)	2.71	0.51	2.77	0.47	－0.867
6 競　争 (Compe.)	2.67	0.57	2.45	0.72	2.415*
7 集団活動 (Gr. active.)	2.70	0.52	2.85	0.38	－2.315*
8 観戦・応援 (W.&.R.)	2.18	0.65	2.44	0.60	－2.928**
9 スリル感 (Thrill)	2.75	0.51	2.66	0.52	1.236
10 自己実現 (Self-actu.)	2.76	0.44	2.71	0.50	0.754

注）各因子の得点は表2の□内の意見の平均値である。　**p＜.01,　*p＜.05

表9　小学生のクラス別，クラブ別などと「楽しさ」の平均値の合計
Total of Means of the Joy Score in Classes, Sport Clubs, and Likes or Dislikes of Sport on the School Children.

Traits		Boys N.	Boys Total Score	Girls N.	Girls Total Score
Class (Teacher)	1. (Male)	22	24.99	21	25.47
	2. (Female)	21	27.02	15	26.93
	3. (〃)	21	27.17	18	26.06
	4. (Male)	23	25.34	20	25.77
	5. (〃)	21	26.25	19	26.92
Club	Athletic	17	26.96	7	26.22
	Volleyball	10	25.93	19	26.38
	Badminton	12	24.90	12	26.64
	Basketball	22	26.86	21	27.15
	Running	20	26.70	3	26.87
	Table tennis	20	25.17	10	27.01
	Cultural	6	25.24	16	24.09
Sport	どちらでもない (Neither)	18	24.94	35	25.22
	好　き (Likes)	50	25.60	46	26.86
	非常に好き (Strongly likes)	37	27.65	9	26.80

(3)　楽しさとクラス別及び運動の好き嫌い

クラス別に合計得点を示すと表9のとおり，男子は3組，女子は2組が高かった。男女を合計すると2組の得点が高く，1組は低かった。両クラスの各因子の平均値をT検定で比較すると男子は「賞賛，観戦・応援」の因子で，女子は「競争」の因子で1～5％水準で有意差が認められた。2組は体育に関心が強い女子教師の担当で，クラス別の体育大会の多くの種目に優勝した実績がある。

つぎに，運動の好き嫌い別に比較した。「非常に嫌

い」は男女とも各1人，「嫌い」は女子に1人のみで，全体的に好意度が高かった。合計得点は好きなものほど高得点を示したが，「非常に好き」群と「どちらともいえない」群の間には，いずれの因子にも顕著な差は認められなかった。

以上，運動の楽しさと諸特性の関係を分析してきた。発達段階によって楽しさの内容が異なることは前にも触れたが，本稿の対象でも同様であった。すなわち，抽出された因子の中で楽しさを感じる程度が高い活動内容は大学生では男女とも「運動の基本的欲求充足，人間関係」で，共通していた。しかし，小学生では「勝利感」では男女共通していたが，その他は男子が，「自己実現，スリル感」であるのに対して，女子では「集団活動，健康」と異なっていた。

また，同じ活動内容でも男女差がみられた。大学生では男子は「スリル感，進歩・向上，競争」での楽しさを感じる程度が高かったのに対して，女子は「人間関係，レクリエーション，観戦・応援」で高かった。小学生でも男子は「勝利，競争」で楽しさを感じる程度が高く，「集団活動，観戦・応援」では女子が高かった。これらのことから，男子は競争的内容で，女子は集団活動，観戦・応援的内容で楽しさを感じる程度が高いことが推測された。

楽しさに個人差があることは今後の授業の中で最も難解な問題であろう。男女差に加えて，現在の運動量によっても異なっている。体育サークルに所属している学生は，男女共通して「人間関係，自主的活動」の因子で，週平均のスポーツの実施程度の多い大学生は男女共「人間関係」の因子で楽しさを感じる程度が高い。その他，男子の大学生や小学生の男女にみられた「挑戦」に楽しさを感じる程度も，運動の実施に重要な関係があることを示唆している。個人差はさらに，体力や運動の好き嫌い及び体育実技の受講コースの選択，正課のクラブ選択といったスポーツ種目の好み，さらには，小学生にみられたように指導者によっても異なっていることが明らかにできた。

これらの楽しさの因子が授業の中で多くの学生や児童に体得されるためには，すでに論じられているように体力，技術との関係[7) 23) 27) 43)]や，楽しさの指導法の工夫[8) 11) 19) 21) 24) 28)]，評価の問題[38) 41)]などが山積している。竹之下[33) 34)]が指摘しているように生涯スポーツの観点からみる時，学校体育の指導のあり方に転換が迫られていることは確かであろう。今後，運動の楽しさと社会学的要因[1—6) 12) 15) 18) 20) 39)]や心理学的要因[9) 25) 26) 35) 37)]の関係やスポーツへの社会化の影響を究明することも重要であろう。多くの研究と実践を積み重ねて，これらの課題を解決してゆかなければならない。

要　約

大学生及び小学生を対象にして体育授業における運動の楽しさの因子を抽出し，その因子と個人的特性の関係を分析してきた。結果を要約すると，つぎのとおりである。

1)．大学生の楽しさの因子として13因子を抽出し，「運動の基本的欲求充足，競争，挑戦，人間関係，レクリエーション，自主的活動，スリル感，観戦・応援，進歩・向上」の9因子を解釈・命名することができた。

2)．小学生の楽しさの因子として14因子を抽出し，「挑戦，勝利感，創造的活動，賞賛，健康，競争，集団活動，観戦・応援，スリル感，自己実現」の10因子を解釈・命名することができた。

3)．大学生では男女とも「運動の基本的欲求の充足，人間関係」の因子に楽しさを感じる程度が高く，そのほか，男子は「競争」，女子は「レクリエーション」に高得点がみられた。性差がみられる因子としては，「スリル感，進歩・向上，競争」では男子が，「人間関係，レクリエーション，観戦・応援」では女子に，それぞれ楽しさを感じる程度が高かった。

4)．小学生では男女とも「勝利感」で楽しさを感じる程度が高かったが，そのほか，男子は「自己実現，スリル感」に，女子は「集団活動，健康」に高得点がみられた。性差がみられる因子は「勝利感，競争」では男子が，「集団活動，観戦・応援」では女子に，楽しさを感じる程度が高かった。

5)．週平均のスポーツの実施程度が多い大学生は男女とも「人間関係」に楽しさを感じる程度が高く，そのほか男子では「挑戦，自主的活動，進歩・向上，競争，スリル感，運動の基本的欲求充足」に高得点がみられた。

6)．過去に体育部に所属した経験のある大学生は，男女とも「スリル感，競争」に楽しさを感じる程度が高く，そのほか男子では「挑戦，自主的活動」，女子では「運動の基本的欲求充足，人間関係」に高得点がみられた。現在，体育部に所属している大学生は男女とも「人間関係，自主的活動」に楽しさを感じる程度が高く，そのほか男子では「挑戦」，女子では「観戦・応援」に高得点がみられた。

7)．大学生ではサークル所属，体力，運動の好き嫌い，

体育実技の受講コースなどの個人的諸特性によって運動の楽しさを感じる程度が異なっていた。

8)．小学生ではクラス別，サークル所属によって若干の因子に差がみられたが，運動の好き嫌いでは好意的態度が多く，各因子に顕著な差は認められなかった。

附記，本研究は日本体育学会第29回大会及び九州体育学会第28回大会で発表した。なお集計にあたっては九大健康科学センターの吉川和利氏にご尽力頂いた。

調査に際しては田島(現笹丘)小学校西嶋恵二校長，津留崎　瞳教諭をはじめ6年生のクラス担任の先生にご協力頂いた。ここに記して深く感謝の意を表します。

引用文献

1) Kenyon, Gerald S., "The Use of Path Analysis in Sport Sociology with Special Reference to Involvement Socialization", International Review of Sport Sociology, 5:191—203, 1970.

2) Greendorfer, Susan L., "Role of Socializing Agents in Femal Sport Involvement", Res. Quart., 48(2):305—10, 1977.

3) Greendorfer, Susan L. and Lewko, John H., "Role of Family Members in Sport Socialization", Res. Quart., 49(2):146—52, 1978.

4) Snyder, Eldon E. and Spreitzer, Elmer, "Socialization Comparisons of Adolescent Female Athletes and Musicians", Res. Quart., 49(3):342—49, 1979.

5) Spreitzert, Elmer, and Snyder, Eldon, E., "Socialization into Sport: An Exploratory Path Analisis", Res. Quart., 47(2): 238—45, 1976.

6)荒井貞光，松田泰定「スポーツ行動に関する実証的研究（2）」体育学研究，22(3): 137—52, 1977.

7)深沢　宏「運動の楽しさと運動技能」学校体育，32(2):18—32, 1979

8)福島良久「楽しさを体得させる指導（小学校）」新体育，47(9):40—42, 1977.

9)橋本公雄，徳永幹雄，金崎良三，多々納秀雄「スポーツ行動の予測因子としての行動意図，態度，信念に関する研究（2）」日本体育学会第30回大会号，192, 1979.

10) 市島憲郎，酒井鉄男「楽しい体育授業のための基本的視点」学校体育，32(2):29—34, 1979.

11) 池田猪佐巳「楽しさを学習指導の中でどう計画するか」新体育，47(9):34—37, 1979.

12) 池田　勝，山口泰雄「スポーツの社会化」体育の科学」，29(8):577—82, 1979.

13) 加賀秀雄「発達に見合う楽しさの変化と学習課題」学校体育，32(2):22—28, 1979.

14) 加賀秀雄「体育の楽しさと運動の楽しさ」体育科教育，27(4):13—15, 1979.

15) 金崎良三「社会体育指導者の指導行動とその規定要因に関する社会学的研究」体育学研究，23(1): 47—58, 1978.

16) 小林篤，体育の授業研究，大修館，1978. pp. 204—06.

17) 小林　篤「運動の楽しさからとらえた体力つくりのあり方」学校体育，32(12):37—42, 1979.

18) 小椋　博，影山健「労働時間がスポーツ参与に及ぼす影響の分析」体育学研究，22(5): 311—19, 1978.

19) 京口和雄「運動の楽しさを学ぶ主体的学習の展開」体育科教育，27(4):16—18, 1979.

20) 松田泰定，東川安雄，荒井貞光「スポーツ行動に関する実証的研究」体育学研究，24(1): 1—11, 1979.

21) 宮本政明「楽しさを味わわせる指導（中学校）」新体育，47(9): 43—45, 1977.

22) 水野忠文「新しい要領（体育）における楽しさと古典散策」新体育，47(9):16—21, 1977.

23) 宮崎義憲「運動の楽しさと体力」学校体育，32(12): 24—29, 1979.

24) 西順一「子どもが求める授業」別冊学校体育，体育授業研究シリーズ1，小学校編，31—44, 1979.

25) 丹羽劭昭，長沢邦子「女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討」体育原研究，23(2):109—19, 1978.

26) 丹羽劭昭，村松洋子「女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究」体育学研究，24(1): 25—38, 1979.

27) 大内晴夫「運動の楽しさからとらえた運動技術の学習過程」学校体育，32(12): 43—48, 1979.

28) 佐伯聡夫「楽しさを求める体育の学習過程の工夫」体育科教育，27(4): 19—21, 1979.

29) 下中邦彦編，心理学事典，平凡社，1967. p.106.

30) 新村　出編，広辞苑，岩波書店，196 7. p.1344.

31) 高田典衛，体育授業入門，大修館，1976. pp.25—28.

32) 高橋健夫「体育授業において子供の欲求をどのように捉えるか—スポーツ欲求と体育の授業—」学校

体育，32(6):13—19，1975.
33) 竹之下休蔵「新しい社会と学校体育の転換」学校体育，32(2):14—21，1979.
34) 竹之下休蔵「体育と遊びの接点—運動の楽しさとは何か—」体育科教育，27(4):6—8，1979.
35) 徳永幹雄，橋本公雄「身体運動は対する態度と行動に関する研究」健康科学，1:53—62，1979.
36) 徳永幹雄，橋本公雄「体育授業における運動の楽しさに関する研究」九州体育学会抄録，4(2):37 39，1979.
37) 徳永幹雄，多々納秀雄，金崎良三，橋本公雄「スポーツ行動の予測因子としての行動意図，態度，信念に関する研究(1)」，日本体育学会第30回大会号，191，1979.
38) 山田 央「楽しくできたか，できないかをどのように評価するか」新体育，47(9):37—39，1977.
39) 山口泰雄，条野豊，池田勝「パス解析によるスポーツ参与の分析」筑波大学体育科学系紀要，2:23—30，1979.
40) 山川岩之助「楽しさについて」新体育，47(9):14—15，1977.
41) 安田祐治「運動の楽しさを学ぶ評価の視点」体育科教育，27(4):22—24，1979.
42) 依田新監修，新・教育心理学事典，金子書房，1977.p.323.
43) 吉沢茂弘「楽しさ体験より健康・体力問題は解決しうるか」学校体育，32(12):49—54，1979.
44) 油谷 遵「楽しさの構造」新体育，47(9):26—29，1977.